

令和4年度「全国学力・学習状況調査」の結果 －分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について－

区名	東住吉区
学校名	矢田東小学校
学校長名	梶原 進

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和4年4月19日（火）に、6年生を対象として、「教科（国語・算数・理科）に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様等に説明責任を果たすとともに、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査内容

(1) 教科に関する調査

- ・国語
- ・算数
- ・理科

(2) 質問紙調査

- ・児童に対する調査
- ・学校に対する調査

3 調査の対象

- ・国・公・私立学校の小学校第6学年の原則として全児童
- ・矢田東小学校では、第6学年 38名

令和4年度「全国学力・学習状況調査」結果の概要

国語科については、全国平均より10ポイント下回り、全ての領域で全国平均を下回った。ただ、「我が国の言語文化に関する事項」は、大阪市平均を上回っていた。算数科については、全国平均より12ポイント下回り、全ての領域で全国平均を下回っていた。理科も、同じく全国平均より12ポイント下回り、全ての領域で全国平均を下回っていた。ただ、平均無解答率については、国語・算数・理科全てで全国平均を下回っており、どんな問題にもチャレンジしようとする子どもたちの意識の高さがうかがえた。国語・算数・理科に共通した傾向として、前年度よりも正答率の向上が見られたが、正答率の高い上位層の人数が少なく、低位層が多いという結果であった。また、この低位層は無答率が高いという傾向があり、これは昨年の結果と比べれば、ほぼ変化はなかった。

分析から見えてきた成果・課題

教科に関する調査より

〔国語〕

「我が国の言語文化に関する事項」「話すこと・聞くこと」「読むこと」に関しては、全国平均と比べると差が少ない。しかし、「言葉の特徴や使い方に関する事項」は12ポイント、「書くこと」は21ポイントと大きく下回っている。表現することに対して、話し合ったり考えたりしたことを、記述したり紹介したりする学習の積み重ねが大切となる。

〔算数〕

「数と計算」「変化と関係」は、全国平均と比べると9、7ポイントと下回っているものの差は大きくない。しかし、「図形」「データの活用」に関しては、18、19ポイントとその差は大きかった。全体的に基礎基本の学習の定着が必要であるが、特に図形など「ものの形」に着目してその性質を理解する力や、数列など伴って変わるべきつかの数字の集まりから変化やその関係を導く力の育成も課題となる。

〔理科〕

「生命」に関する領域については、全国との差は5ポイントの差であった。しかし「エネルギー」「粒子」「地球」の領域では大きく下回っている。「電気」や「水溶液」などの理科的な知識の習得と活用、さらには理科的な思考を表現する力の育成が課題となる。

質問紙調査より

「将来の夢や目標を持っていますか」「人が困っているときは進んで助ける」「いじめはどんなことがあってもいい」となどを肯定的に回答した児童の割合は、ほぼ全国を上回っている。しかし、「自分によいところがあるとおもいますか」「家で自分で計画を立てて勉強していますか」「1日当たりどれくらいの時間勉強していますか」の項目については、下回った結果となった。これらの結果から、昨年と比べると他者に対する思いやりをもち学校生活について肯定的にとらえている児童が多いようである。しかし、学習に対する意識の低さが課題となっており、特に家庭学習など授業時間以外の学習時間の確保や、意識の向上が課題となっている。

今後の取組(アクションプラン)

昨年と比べれば数値の上昇がみられるが、未だに国語や算数を得意としている児童が少なく、今後も継続して習熟度別少人数学習や「矢田東小学校クライミング」に取り組むなど、基礎学力を定着させ、学力を引き上げる手立てが必要である。とくに国語では「書く」ことを苦手としている児童が多く、習熟度別の活動や個に対する指導の工夫が必要である。低学年からの系統立てた指導や「書く」技能の習得を確実にしていくことが大切である。「読書」については、さらに読書活動の充実を図るために、図書室の利用促進や「読書ノート」の継続活用に力を入れていきたい。

今回の調査でも生活習慣と学力に関係があることが明らかである。「生活振り返り週間」などを通して、児童だけでなく家庭・保護者にも啓発を進めていく必要がある。

【 全体の概要 】

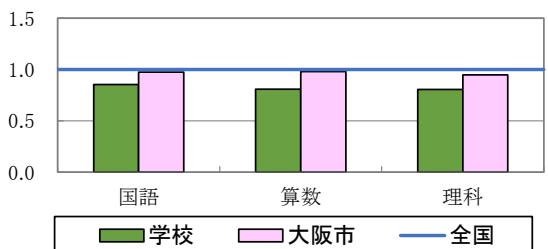
平均正答率 (%)

	国語	算数	理科
学校	56.0	51.0	51.0
大阪市	64.0	62.0	60.0
全国	65.6	63.2	63.3

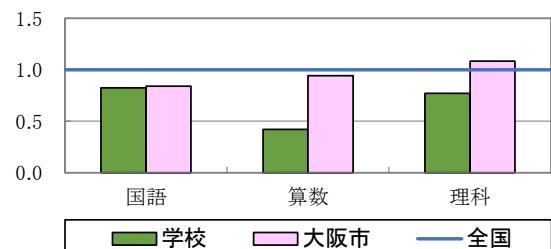
平均無解答率 (%)

	国語	算数	理科
学校	4.7	1.5	2.8
大阪市	4.8	3.3	3.9
全国	5.7	3.5	3.6

平均正答率(対全国比)



平均無解答率(対全国比)



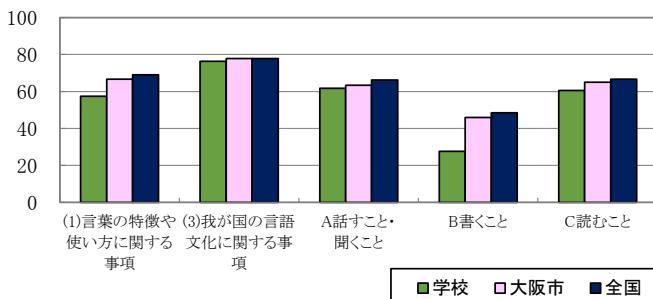
【 国 語 】

学習指導要領の内容	対象設問数(問)	平均正答率(%)		
		学校	大阪市	全国
(1)言葉の特徴や使い方に関する事項	5	57.4	66.7	69.0
(2)情報の扱い方にに関する事項	0			
(3)我が国の言語文化に関する事項	1	76.3	77.8	77.9
A 話すこと・聞くこと	2	61.8	63.4	66.2
B 書くこと	2	27.6	46.0	48.5
C 読むこと	4	60.5	65.0	66.6

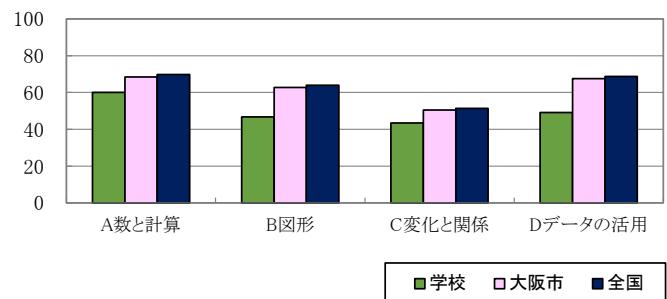
【 算 数 】

学習指導要領の領域	対象設問数(問)	平均正答率(%)		
		学校	大阪市	全国
A 数と計算	6	60.1	68.4	69.8
B 図形	4	46.7	62.8	64.0
C 測定	0			
C 変化と関係	4	43.4	50.5	51.3
D データの活用	3	49.1	67.5	68.7

国語 領域別正答率(学校、大阪市、全国)

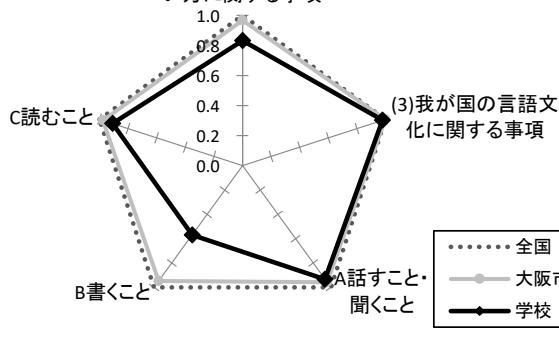


算数 領域別正答率(学校、大阪市、全国)



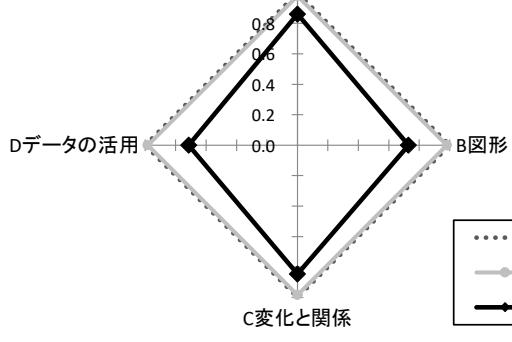
国語 領域別正答率(対全国比)

(1)言葉の特徴や使い方に関する事項



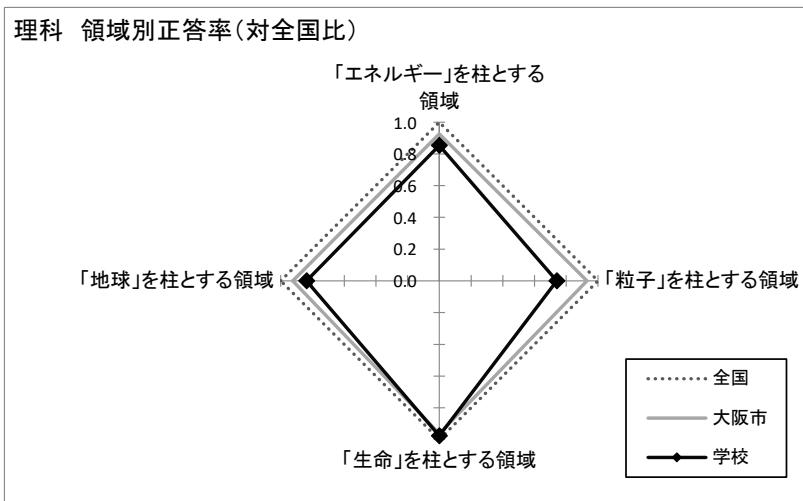
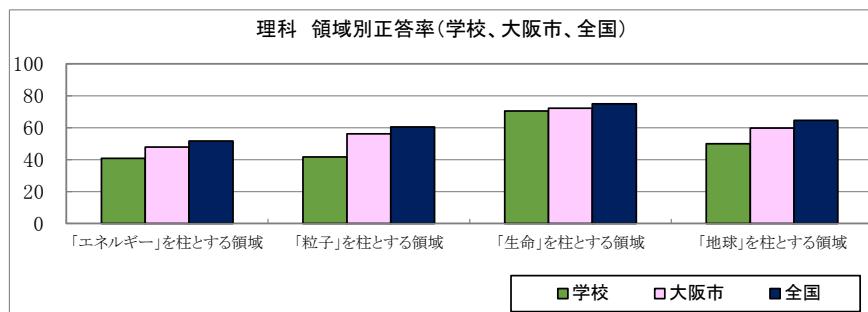
算数 領域別正答率(対全国比)

A数と計算



【 理科 】

学習指導要領 の区分・領域	対象 設問数 (問)	平均正答率(%)		
		学校	大阪市	全国
A 区分	「エネルギー」を 柱とする領域	4	40.8	47.8
	「粒子」を 柱とする領域	5	41.6	56.2
B 区分	「生命」を 柱とする領域	5	70.5	72.2
	「地球」を 柱とする領域	5	50.0	59.7
				64.6



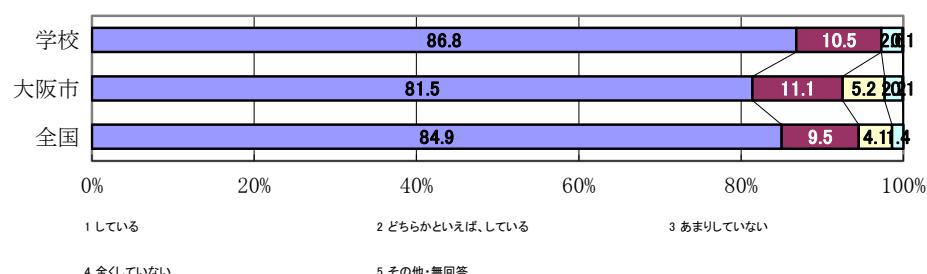
児童質問紙より

□1 ■2 □3 □4 □5 ■6 ■7 ■8

質問番号
質問事項

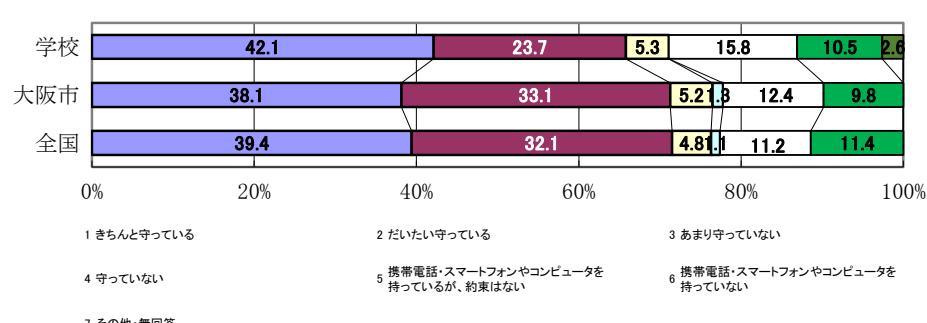
1

朝食を毎日食べていますか



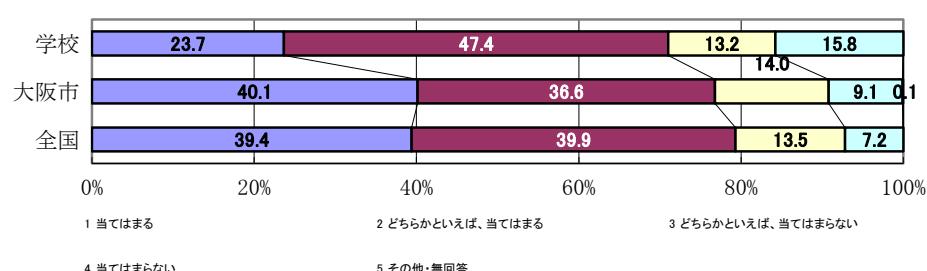
4

携帯電話・スマートフォンやコンピュータの使い方について、家人の人と約束したことを守っていますか



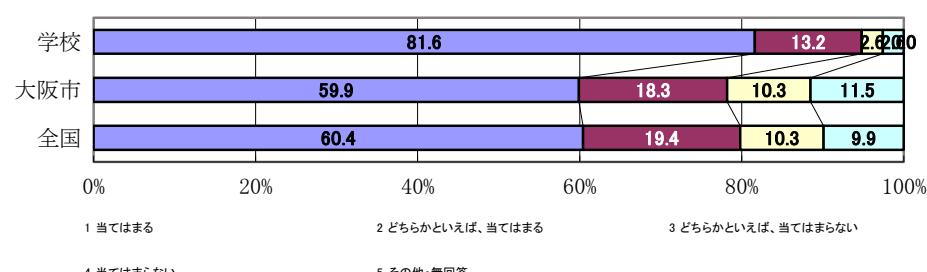
7

自分には、よいところがあると思いますか



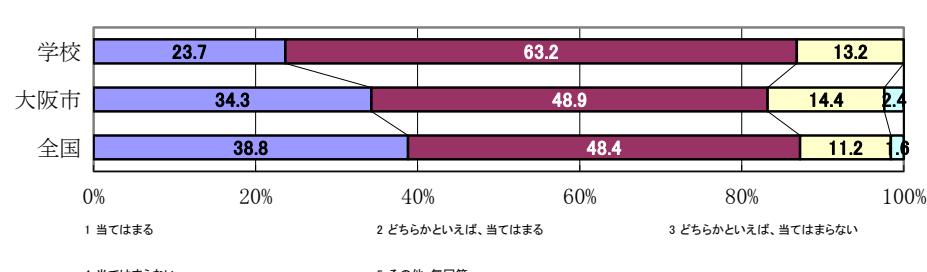
9

将来の夢や目標を持っていますか



10

自分でやると決めたことは、やり遂げるようにしていますか

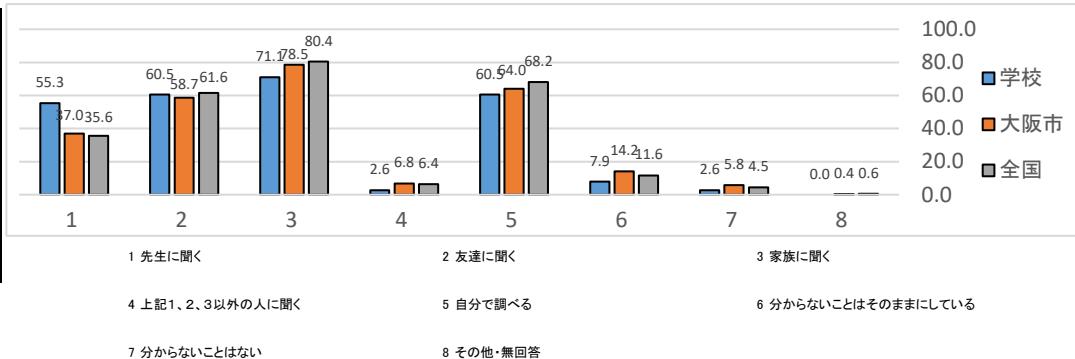


児童質問紙より

質問番号
質問事項

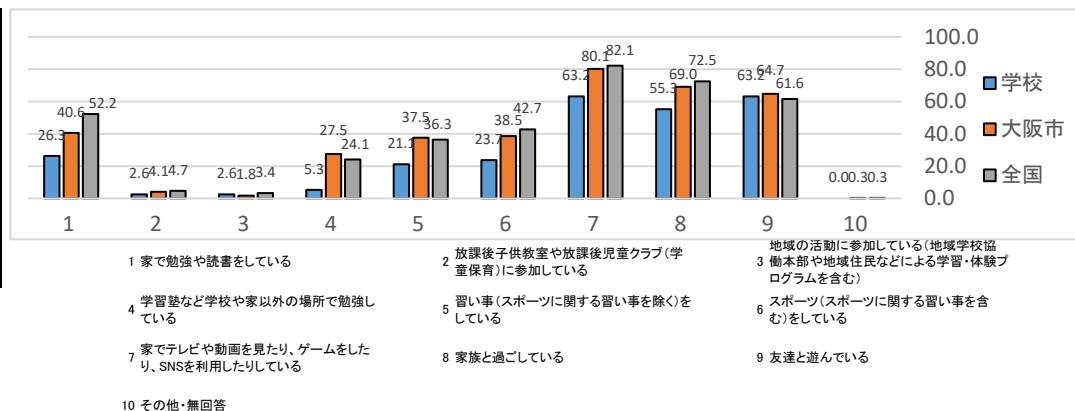
19

家で学校からの課題で分から
ないことがあったとき、どのよう
にしていますか(複数選択)



31

放課後や週末に何をして過ご
すことが多いですか(複数選
択)



学校質問紙より

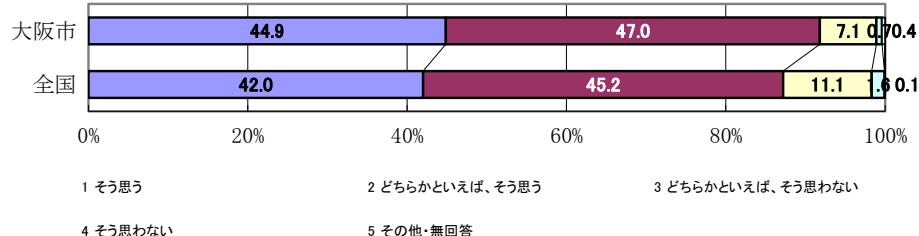
□1 ■2 □3 □4 □5 ■6 ■7 ■8 ■9 ■10

質問番号
質問事項

7

調査対象学年の児童は、授業中の私語が少なく、落ち着いていると思いますか

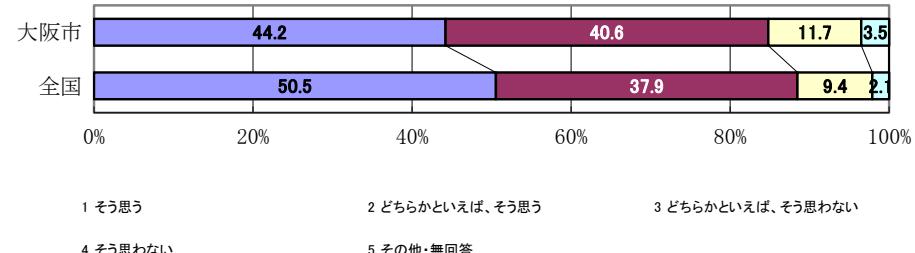
学校 「どちらかといえば、そう思う」を選択



11

スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーによる教育相談に関して、児童が相談したい時に相談できる体制となっていますか

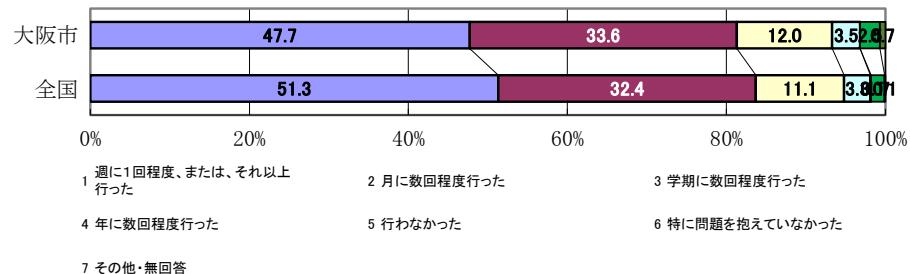
学校 「そう思う」を選択



13

前年度に、教員が学級の問題を抱えている場合、ともに問題解決に当たることを行いましたか

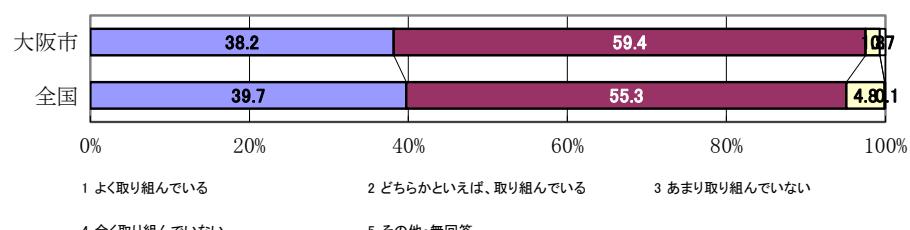
学校 「月に数回程度行った」を選択



14

ICTを活用した校務の効率化(事務の軽減)に取り組んでいますか

学校 「よく取り組んでいる」を選択



15_1

ICTを活用した校務の効率化を通じて、児童の出欠・遅刻に関する事務は軽減しましたか

学校 「どちらかといえば、軽減した」を選択

